

特集

江戸袋物の粹(三)

江戸の舶来趣味 南蛮・紅毛好みの袋物

江戸風俗研究家 平野 英夫

江戸袋物の様々な前金具や板鎖など、これまで二回に渡って紹介してきたが、三回目となる今回は、南蛮・紅毛。すなわちオランダを中心とした国々の影響を受けた品々を中心に、取り上げてみたいと思う。

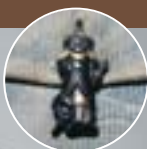
オランダの学問・蘭学は、18世紀を迎えると、上・下層にも普及し、特に島津重豪など、西洋気触れ、すなわち蘭癖大名と呼ばれる人々が現われてくる。中でも福知山三万二千石藩主朽木昌綱は、珍奇な西洋の貨幣蒐集にとりつかれ、天明7年(1787)オランダ・イギリス・ロシアなど、西洋貨幣(銀銭・銅銭130余种)を網羅した「西洋錢譜」を自ら出版した。

今回、始めに紹介する金具類は、この「西洋錢譜」にも掲載されている同型のコインが使用されており、どのような人々が使用していたかを知る上でも、興味ある品々である。

まずはオランダ好みの袋物から……。

- ①二ツ折形式の大形紙入れ。空色と生成り色の横太縞に鋸歯文と菱文を織り出した、風合いの良いオランダ木綿を使用。
- ②前金具の拡大。1770年製オランダの通貨である1/2デュカトン銀貨を使用。剣を振り上げ甲冑姿の馬上の騎士は国王であろうか。下部にはオランダの国章クラウンと、盾には獅子が描かれている。前金具である銀製コインと派手目な縞裂とのバランスが程良く、現代でも使用可能なデザインの袋物である。
- ③第20号誌上、写真⑩で紹介した袋物の表側。横長三ツ折形の紙入れ。兵士とオランダ船を描いた更紗裂を使用。
- ④前金具には、帆船をデザインしたオランダ領・ブーランドコインを使用。裏の止め金具にもオランダ東インド会社、銅製V・O・Cコインを使用している⑤。
- ⑥これもオランダ好みの一ツ提げ煙草入れ。ほぼ正方形に仕立てられた吠は、霊鳥や花唐草文をシンメトリックにエンボス加工した無地金唐革を使用。輪郭線および余白部分に深緑色樹脂でアクセントを付けた極めて稀な革である。
- ⑦前金具は、銀地の平板全面に、オランダ文様と呼ばれる果実花唐草文を毛彫りで繊細に彫り上げ、アマルガムメッキにより金色を施す。その地板に銀の筒状摘みを三ヶ所設け、表面にオランダの国名であるHollandの頭文字H・O・Lを打刻。この三つの摘みのいずれかを回せば





開閉出来るように考えられた、機智に富んだ遊び心のある前金具である。この機巧は、オランダから渡来した金庫のダイヤル錠を参考にして造られたものと想像される。

⑧根付は、象牙台にオランダ東インド会社製大型1ドュカトン銀貨(1739年製・直径4.0センチメートル)を鏡蓋形式で利用。クラウンを戴いた楯を、左右の獅子が支え持つデザインでコインの裏面である。東インド会社のマークOCは「Vereenighde Oost Indische Copnie」(オランダ東インド会社)の頭文字を組み合わせたものである。ちなみにV・O・Cマーク入りコインは、金・銀・銅の三種類造られ、オランダ東インド会社の勢力圏内で通用したもので、日本産出の金・銀・銅も、これらのコインに鑄造されていたと想像される。

⑨オランダ好みに対し、ロシア好みで統一された一ッ提げ煙草入れ。扱はロシア製辞書などの大形書物の表紙残欠部分を利用。この様な金箔押デザインの革は、当時の日本にとって非常に珍しく再利用したのであろう。仕立ても、高度な閑清縫^{かんせいぬい}で丁寧^{かんせいぬい}に仕上げられている。

⑩被^{かぶせ}に合わせた前金具は、帝政ロシア時代・エカテリーナⅡ世銀製コインを利用。

⑪根付も黒檀^{ひきだい}の挽台に、王冠を戴いた双頭の鷲をデザインした大型銀製ロシアコイン(1817年)を鏡蓋に造り上げている。

ロシアは文化元年(1804)長崎に来航。その約50年後の嘉永6年(1853)プチャーチン率いるロシア艦隊が再度長崎に現われ、国書を渡す。その2年後の安政2年(1855)日露和親条約を締結している。

以上西洋コインを袋物金具類に転用した例を示したが、他の国々、南蛮と呼ばれたスペイン・ポルトガル、そして黒船来航で幕末日本を震撼させたアメリカなどのコインを使用した袋物類が発見されると、また江戸後期の歴史の位置付けが出来ることであろう。

⑫、⑬は、オランダ木綿の銅版更紗で仕立てられた小形の紙入れ。細密な淡い藍色でプリントされたこの図柄は、ストーリー性を感じさせ、被^{かぶせ}から裏面にかけて樹下男女図。袋の正面には、オランダ船と想われる舳先^{へさき}が垣間見られ、VOKやVEなどのアルファベットも散見。全体の意味合いを読み解くことが出来れば、より興味深い作品になるであろう。今後の解明は中世ヨーロッパ絵画の研究家に委ねたい。

⑭前金具は、鞆鞆人^{たつたんじん}と洋犬。赤銅地、金・銀色絵の容彫^{かたちぼ}りて造られた目貫^{めぬき}を転用。裂地と金具との色合いのバランスが良く、気品ある袋物に仕立てられている。

⑮大形の三ッ折形紙入れ。藍地に緯糸^{よこいと}で唐子や花唐草文。宝尽しや平仮名文など、あまり類型のないデザインの裂地を使用。

⑯前金具は、小判形にとった真鍮地に、金・銀・赤銅を象嵌。鼻高で髪^{かみ}の毛のウェーブの描写など南蛮人の特徴を良くとらえている。作者は、江戸時代後期に活躍した斎藤直義で、人物図を巧くした作家である。この図は浮世絵師、勝川派が描いた図と酷似するところがあり、浮世絵を参考にしたものと考えられる。

⑰裏側に取り付けられた引っ掛け金具も真鍮で打出され、アルファベットのTとSとを反転し絡めさせたデザインになっており、多分に西洋を意識したものであろう。

⑱オランダロココ時代の金唐革を使用した特大の紙入れ、と言うよりも冊子入れであろうか。地色のトルコブルーと金色に彩られたシメトリックなデザインが素晴らしい。

⑲前金具は、素銅地丸彫りで、振り向き獅子を容取る。和風の唐獅子ではなく西洋のライオンの図柄にしているところがミソである。

⑳内側を全面開いたところ。オランダ船内で使用された壁装材を使用。麻地の上に顔料でオランダ国章である獅子(ライオン)を描いている。

㉑のロシア製書物の表紙残欠を使用した袋物と共に、外国の貴重な素材を無駄なく使用した好例である。

㉑、㉒相良縫で仕立てた二ツ折紙入れ。表側は、岩上のオランダ人が、渦巻く海原を望む情景を、縫漬しと散縫で表出。裏側も、同技法により、唐船と想われる帆前船を紙入れ一杯に描いている。

㉓銀製板鎖は、オランダ石榴文を中心に赤い珊瑚の小玉をポイントにした七宝文金具を小豆鎖でつなぎ、異国情趣を醸し出している。

㉔蘭方医が使用したと想像される、一ツ提形式の携帯用薬入れ。

㉕オランダ金唐革の吠には、丁寧な閑清縫が施され、前金具には渡り物の白蝶貝でオランダ石榴文を彫刻した引掛け金具が付く。

㉖根付は、平戸焼きの饅頭根付で、表側にはオランダ牡丹文。裏側には[安政年製][寅]と年記があり、安政元年甲寅(1854)と解る。この饅頭根付の最大の特徴は、薬研の目的を持つことで、円い角の部分で薬を細かく砕く事が出来る用に工夫されている。

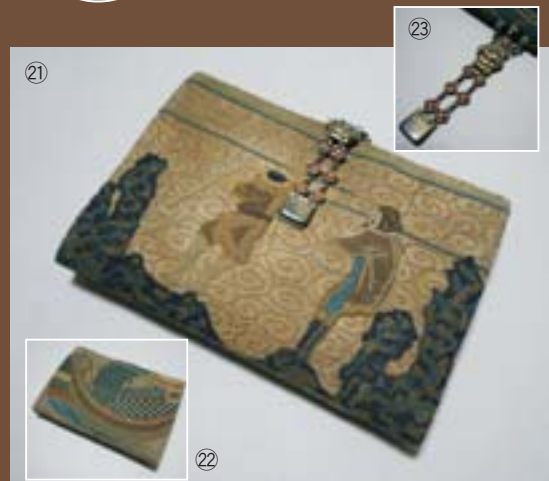
㉗、㉘この腰提げ薬入れの中に折り畳まれ、収納されていたのが薬の包紙である。藍摺の商標には、蘭方・「大人ねつまし・小児むしおさへ・(薬名) きなへゑん」とあり、きなきなとはキナキナ(quina quina)、キナ皮のこと。アカネ科キナ樹皮、キニーネの旧名。江戸時代には大変貴重な万能薬であり、悪性熱、諸失血、下痢、赤痢、月経過多、痘瘡、麻疹等々に効いたという。

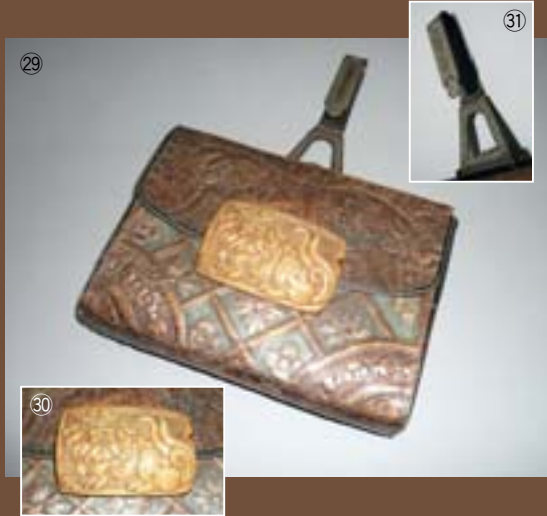
㉙ロココ時代のオランダ金唐革を使用した^{どらん}胴乱。元々胴乱は、鉄砲の弾丸や火薬、又その火薬を入れる^{はやごう}早合などを収納する為に造られたといわれ、その後、銭や薬、煙草や印章などいろいろな物を入れるようになった。そのため、^{まろ}幅を大きく取る様になり、今でいうウエストポーチと同類と想えばよいであろう。

㉚前金具の拡大。タテ4.6センチ、ヨコ7.0センチ、厚サ1.6センチの大形前金具で、太い鬚に威厳のある顔、太い四肢を踏まえたライオンをユニコールで浮彫りしている。素材ユニコールは、海獣イッカクのこと、そのユニコールの角の最も太い根元部分を使用。このユニコール独特の飴色は、象牙の色合いとは異なり、好事家が大変珍重したものの一つであり、また前記のキナキナと同じように解熱薬としても利用され貴重品であった。

㉛この胴乱を帯に差して止める帯差し金具。鉄地に蝶番部分を二ヶ所設け使い勝手を良くし、上側のUの字状に反り返した部分を帯に差して固定。地板には、南蛮文様と呼ばれる稲妻文や雨龍、唐草文などが、金・銀の布目象嵌で施され、異国情趣を表出している。

㉜、㉝今回唯一の女性用袋物。





オランダロココ鳥手とりでの金唐革を使用した懐中鏡入れ。鏡は袋の中に収納されて見えないが、その鏡に取り付けられているのが華鎖(20号誌上で紹介)で、その先端は、趣向を凝らした細工物で飾られる。

③④、③⑤は先端の細工物で西洋の酒瓶(ボトル)を造形。2センチ程の小物であるが、表側聖女、裏側花文十字と、細部にまで鑿たがねが行き届き、鋸職人かざりの力量たしの慥かさが見て取れる一品である。ちなみに、上の摘みはネジ式になっており、香水などを入れられる様になっている。

最後は、武家仕様の提げ物。武家が腰間を飾る下げ物といえ、直ぐに思い浮かぶのが印籠であろう。江戸前期頃の風俗を描いた「花下遊覧図」などを見ると、人々の腰間には、この様な印籠きんちやくと巾着とを一諸に提げている姿が散見される。この根付から印籠と巾着とを一諸に提げることを含い提げと呼んだ。この風習は、江戸の中期以後になると、印籠・巾着それぞれを独立して提げる様になってくるのである。

③⑥合い提げ。根付は、素銅地で馬の鞍を形造り金の桐紋金具を据える。印籠は梶川作の溜塗り仕上げで一段造り。正面に据えられた円形銀板には、胡人狩獵図を毛彫と片切彫とで見事に彫り上げ、今まさに矢を射ろうとする刹那の姿を活写。③⑦印籠の裏面。狩獵の獲物である虎を、張子の虎に置き換え、金蒔絵で表現。江戸の粹と洒落とを感じさせる逸品である。彫金師は、名匠横谷宗珉の流れをくみ、文化～天保にかけて活躍した五代目横谷宗珉と鑑せられ、初代とは作風は異にするが、巧手を知られた作家である。③⑧拡大。

添えられた巾着は、インド製白地一番手の金更紗で、花唐文の控え目な淡い色合いが、この合い提げの品格を更に高めているといえよう。

おわりに

今回、南蛮・紅毛好みの袋物と題して特集を組ませて戴いたが、数十年前手に入れた紙入れが、倉庫の整理中偶然出て来たのが事の発端であった。その裂地の風合いの良さ、余りの色合いの斬新さと、そこに使われているコインの前金具のバランスに、改めて感動してしまったのがその切っ掛けで、①、②の袋物がそれである。西洋コインを袋物の金具に転用する例は、特定富裕層(諸大名や長崎奉行、総町乙名、オランダ通司、あるいは長崎ゆかりの遊女や芸者など)に限られており、伝世品も少なく、私も二例程しか見ていない。

今回このような品々を紹介できたことは幸せであり、また機会があれば渡り物の裂類や金唐革なども発表したいと思う。

平野 英夫 (Hirano Hideo)

- 1947年 東京日本橋生まれ
- 1966 東京都立工芸高等学校金属工芸科卒業
- 1972 ジュエリーデザイン・クラフトマンとして独立
- 2005 ドイツ文化会館、日独シーボルトシンポジウムにて公演
日本橋越後屋ステーション「江戸の祭禮」他、半年に渡り企画展
- 2008 長沼静きもの学院「サムライ火消の男達」展
- 2008 江戸・東京博物館「江戸の華」展
- 2009 平木浮世絵美術館 江戸のデザイン「千社札」展
- 2009.10～11月 青山紅ミュージアム「江戸の赤」展開催中

仕事の傍ら江戸コレクション・江戸風俗の研究に努め、サントリー美術館、日本橋高島屋などでもコレクション展を開催。